

研究ノート

インド南部の仏教徒運動における僧侶の役割 —ボディ・ダンマ僧侶の活動事例

榎木 美樹*

The Role of Monk in Buddhist Movement in South India: A Case Study of the Activities of the Reverend Bodhi Dhamma

ENOKI Miki

Abstract

For the field research that was conducted for this paper, the sole subject of concern has been the role of the monk in the Buddhist movement, which has an impact upon both the Buddhist population and Indian society in general. With this objective, and with the cooperation of the Reverend Bodhi Dhamma — who has been working in South Indian states including Maharashtra, Karnataka and Andhra Pradesh —, I visited Buddhist communities as well as non-Buddhist communities that are preparing to adopt the religion in the near future.

Apart from taking initiatives for the promotion of downtrodden people, irrespective of their various circumstances, Rev. Bodhi, as a practitioner of Ambedkar thought, has also engaged in connecting contemporary Indian people with the vision and thought of the late B.R. Ambedkar. Not limiting himself to this, Rev. Bodhi has also initiated the development of a bond between Indian Buddhists and the international community at large.

The study also underlines the holistic approach of the Indian Buddhist movement which includes the involvement of youth. The term 'holistic approach' refers to the activities of Buddhist people who have been uplifted as a result of Ambedkar's thought and his visionary leadership, whereby the consciousness of self awareness, or Buddhist identity, is largely seen as infinite, depending upon the behavior of individuals and their struggles.

要旨

本研究は、人口規模および社会に与えるインパクトの点で影響の大きい仏教徒運動における僧

* 独立行政法人国際協力機構 企画調査員

・ 2010、『インドの「闘う」仏教徒たち—改宗不可触民と亡命チベット人の苦難と現在』、風響社。
・ 2004、『現代インドにおける仏教徒コミュニティー—グブル市を事例として』、神子上恵生教授頌寿記念論集刊行会編、『インド哲学佛教思想論集』、永田文昌堂、177-215頁。

侶の役割を現地調査から明らかにするものである。そのために、ナーグプル市以南（マハーラーシュトラ州、カルナータカ州、アーンドラ・プラデーシュ州）を活動範囲とするボディ・ダンマ僧侶の協力を得て、既に仏教に改宗した、あるいは将来の集団改宗に向けて準備をすすめるコミュニティを訪問した。

ボディ僧侶の役割は、アンベードカルの教えの実践者として、異なる立場の民衆の要請を実現するためのイニシアティブをとることに加え、今を生きる民衆と故人であるアンベードカル、インド仏教徒と国際社会を結びつけることである。本件調査によって、ボディ僧侶を中心とする運動では俗人青年層の活躍が顕著であり、また彼の運動は、アンベードカルの業績や言動の延長線上に自らを位置づけつつ、被抑圧者としての自覚に基づいた仏教徒アイデンティティの喚起や鼓舞を骨子とする仏教徒民衆の行動の総体であることが確認できた。

1. はじめに

1-1. 研究の目的

本稿は、インド南部の仏教徒¹⁾運動を牽引するボディ・ダンマ僧侶（Bhadant Bodhi Dhamma、以下ボディ僧侶と略称）²⁾の活動事例から、現代インドにおける仏教徒運動における指導者としての僧侶の役割を考察することを目的とする。

インド南部においては、近年、仏教への集団改宗式が頻繁に挙行されている³⁾。このような仏教徒の運動は、従来、マハール⁴⁾民衆を中心とするマハーラーシュトラ州で活発であると考えられてきたが [Omvedt 2003: 264; Beltz 2005: 262]、2001年以降、本稿で取り上げるアーンドラ・プラデーシュ州、カルナータカ州に加え、デリー⁵⁾、ラージャスターン州⁶⁾などへも広がりを見せつつある。またそれはテレビ、新聞、ウェブサイトを通してニュースとして取り上げられるようになった。

現代インドの社会運動の中で仏教徒運動は、当事者による仏教への改宗といった短期的かつ直接的な行動が注目されるが、一方で、改宗後の信仰維持や仏教徒の再生産のサイクルといった中・長期的な問題については現地調査に基づいた実態解明研究が希少である。こうした問題意識の下、運動とは実際に何がどのように行われるのかを明らかにする。本稿では特に、当該コミュニティへ外部者として招かれて参加し、人々が仏教徒として生きるために道筋をつけていく僧侶の役割を検討する。

1-2. 調査の方法

調査期間は2009年10月26日－11月4日で⁷⁾、キーパーソンたる仏教僧や当該地の青年仏教徒の案内を得て、既に仏教に改宗した、あるいは将来の集団改宗に向けて準備をすすめるコミュニティを訪問し、改宗式や決起集会に参加して参与観察を行った。必要に応じて、式典・集会参加者に対して相対による聞き取りを行い、仏教徒やこれから仏教徒になる意志を持つ人々の間で何が行われ

ているのかという実態把握と意見聴取に努めた。外国人たる日本人が式典・集会に臨場していることから、訪問目的を説明したり、請われてスピーチを行う場面もあった。調査する側と調査される側による、言語や非言語を用いた相互のインターアクションが本件調査の骨子となっている。

また、本件調査は人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」龍谷大学拠点龍谷大学現代インド研究センター（Center for the Study of Contemporary India at Ryukoku University：以下 RINDAS）のユニットⅡによる、インドにおける研究協力体制の構築を図るための予備調査という位置づけもあった⁸⁾。したがって、本件調査には、筆者以外に RINDAS 予備調査団員として、長崎暢子研究代表／龍谷大学名誉教授、佐藤智水龍谷大学教授、中西宏晃 RINDAS リサーチアシスタントが同行していた。

1-3. 問題の所在

1956年10月14日、B.R. アンベードカル⁹⁾を先頭に、ナーグプル市で30万とも60万ともいわれる人々が、仏教へ集団改宗した。それに引き続く改宗を通して、インドの仏教徒人口は、18万人（インド人口比0.05%[インド国勢調査1951年])から326万(インド人口比0.7%[インド国勢調査1961年])に増大した。現在の仏教徒人口は796万人（インド人口比0.8% [インド国勢調査2001年])である。

教育者であり、経済学者、弁護士、政治家であったアンベードカルが起こした被抑圧階層の社会的地位の向上を目指す運動は、「不可触民¹⁰⁾」解放運動 [小谷 1996; 内藤 1994; 堀本 1994]、マハール運動 [Zelliot 1998]、アンベードカル運動 [Limaye 1995; Varma 1998; Omvedt 1994]、ダリット運動 [Omvedt 1994] などと呼称され研究されてきた。いずれも自由・平等の獲得あるいは不平等の解消に対して、被抑圧者自らが主体となる。これらの運動が、1956年の仏教への集団改宗を機に、仏教徒あるいは将来の改宗を射程に入れる人々が推進する運動へと転換され、仏教徒運動という潮流を創り出している [Fitzgerald 1988, 1989; Omvedt 2003; Beltz 2005; 榎木 2003, 2004, 2006]。

集団でヒンドゥー教から仏教へ改宗するという仏教改宗運動は個人的なイデオロギーの問題というよりも、コミュニナルで社会的な行為である [Tarkov 2003: 194]。仏教への改宗は、「社会的平等」(social equality) を求めてなされ、社会的平等を獲得するためにはヒンドゥー教は否定され拒絶されて、自由と平等に基盤を置くブッダの教え (= 仏教) にしたがって生きることが確認される。ゆえにヒンドゥーの神々と伝統の否定から「22の誓い¹¹⁾」は始まる [同: 195-198]。

アンベードカルは、バラモン主義への批判、カースト制度の否定、ヒンドゥー教の放棄と仏教への改宗を通して、「不可触民」を含む被抑圧者の社会的地位の向上を目指して活動した。アンベードカルにとって解放の思想の根底を支える自由・平等・友愛の概念は、仏教によって顕現されるべきもの¹²⁾であり、差別と迷信のヒンドゥー教を放棄することは運動を遂行する上での必要条件となった。政治家でもあったアンベードカルが改宗という宗教行為を通過点にして運動を展開したことにより、解放運動と宗教問題は分かちがたいものとして意識化され組織化された。

組織化は、政治的権利の獲得をもって「不可触民」の解放を志向するインド共産党¹³⁾やダリット・パンタル¹⁴⁾といった政治組織となって結実するが、これらは後に分裂を繰り返し衰退していった〔堀本 1994: 340–345〕。

島岩は1990年代頃までのマハーラーシュトラ州における仏教団体では、佐々井秀嶺¹⁵⁾、TBMSG¹⁶⁾、ヴィバッサナー瞑想センター¹⁷⁾の活動が顕著であることを報告している〔島 1995〕。筆者が行った90年代後半以降の調査では、これら3者に加えて日本と台湾の仏教教団が新たに登場していた。

1990年代から2000年までのナーグプル市を中心とするマハーラーシュトラ州の仏教徒の運動については、質問票調査を実施して、外国の仏教組織と関係を持ちながら宗教的アイデンティティを構築している人々の実態を拙稿にて明らかにした〔榎木 2003, 2004, 2006〕。1956年の集団改宗以降、現在に至るまで、ナーグプル市の仏教徒はアンベードカルの教えを学んで実践してきた。仏教徒の挨拶は「ジャイ・ビーム¹⁸⁾」(Jai Bhim)になり、個人名や居住地の名称はヒンドゥー教の神々の名前から仏教関連のものに変化してきた¹⁹⁾。仏教徒の家には法輪や仏塔を模した仏教関連のモチーフが、たとえば門扉に使用されるなど、一見して仏教徒であることが判別できる場合が多い〔榎木 2003: 158–163; 2006: 72–76〕。彼らが情報源にするのは、アンベードカル自身の著作や、仏教もしくはアンベードカルについて書かれた著作、仏教僧侶の説法や他の仏教徒の語りである〔同 2006: 73〕。中でもアンベードカル著『ブッダとそのダンマ』およびアンベードカルが作成した22の誓いが主要な情報源となっている。22の誓いはコンパクトで容易に暗唱できるので、特に頻度が高い。アンベードカルは、政治および宗教を含む包括的かつ総合的なリーダーシップを発揮したが、その後、彼ほどのカリスマ性に富むリーダーは輩出されていない。政党所属者を中心に政治的指導者がいるが、政治家としての地位争いや資金を集めることに奔走しているため、ナーグプル市を中心とする仏教徒民衆は、政治的リーダーは誰もいないとする。その一方で、外国の仏教組織を通して教義の習得や瞑想の実践を行って仏教徒として修養し、宗教的リーダーは佐々井秀嶺だと認識していた²⁰⁾〔榎木 2006: 80–82〕。同時に、諦めと自己コミュニティへの批判が顕著で、「本当の仏教徒の不在」「自己中心性」「偽善」「妬み」「怠惰性」が仏教徒の発展を妨げているとの認識がある〔同: 82–83〕。ナーグプル仏教徒にとっては、アンベードカルの死後、仏教徒の政治家が一般の仏教徒からの信頼を喪失する一方で、佐々井僧侶の登場以降は、彼のイニシアティブの下、宗教活動としての仏教運動を開花させていった。

クシルサガルは、1850年代から1990年代までのアンベードカルを含むダリット・リーダー155名について、彼らの生い立ちや運動の特徴を整理した〔Kshirsagar 1994〕。それらダリット・リーダーの出身はマハーラーシュトラ州が最も多く(48/155人)、出自としてはマハールが最多(40/155人)であった。筆者のインフォーマントの中には、クシルサガルが析出した154名の名前を挙げた者は、アンベードカルを除き、一人もいなかった。出自を支持の基礎とする俗人のリーダーは数多いものの、

仏教徒あるいはダリット全体から支持を得るような俗人の指導者を挙げることは困難なのである。

現在のナーグプル市の一般仏教徒の中には、知識人層を中心に仏教徒活動家がいる。政治活動に重点を置くわけではなく、自らの職業や仏教実践を通して、仏教徒への啓蒙活動や社会活動を行う者たちである。根本は、ナーグプル市の仏教徒たちは政治活動を選択するのではなく、佐々井僧侶の登場を契機として、仏教復興運動を活性化させたことを述べる。佐々井僧侶による仏教復興が日常の仏教儀礼などの仏教文化要素を意味づける一方、仏教徒活動家による仏教復興運動は差別的宗教たるヒンドゥー教の否定からアンベードカルの提唱した平等の仏教への移行と実践を強調することにその差異があるとする [根本 2010: 66-73]。現代を生きる仏教徒を牽引するのは、仏教文化要素を意味づける僧侶と仏教への移行と実践を強調する活動家の2つの軸であることがわかる。

アンベードカルの教えに従う僧侶や活動家によって、ヒンドゥー教由来のものが仏教のものに置き換えられ、自らを取り巻く日常的な環境からヒンドゥー教的要素を排除してアンベードカルの教えに基づく世界につくり替える「操作的客体化」をナーグプル市の仏教徒は行っている [根本 2010: 123-128]。操作的客体化を通じて、民衆はアンベードカルの正当性を確認し、固有名詞から普通名詞で表わされるカテゴリーに自分の経験を配置することで差別に抗するアイデンティティを構築しているのである。

アンベードカルは、『ブッダとそのダンマ』の中で、僧侶は戒律をよく守り、自己修養を積み灯明のごとく俗人を導くのが本分であり、サンガ（僧伽）はブッダの教えを具現化する社会モデルであると述べた [Ambedkar 1997: Book V Part I-II]。しかし現実には、僧侶は貪欲や修養不足により批判の対象になっている。俗人と僧侶の関係性についてベルツは、多くの仏教徒は僧侶を見た事がなく、アンベードカルに従う仏教徒運動は、基本的に俗人による運動であると述べる [Beltz 2005: 202-203]。仏教徒活動家の仏教教団に対する意見は、一様にして強い憤りを伴ったネガティブなもので、アンベードカルが他のアジア諸国の仏教僧を役立たずの寄生的な存在であると批判したことでも強められた [同: 202]。インドにいる他国の僧侶が豪華な車に乗っていることや、インド人僧侶が教養に乏しく仏教について知識を持たないことに対する批判の声を引きながら、インドの仏教徒運動において仏教僧はキープレイヤーではなく、ダリット文学においても周辺的役割しか果たせず、仏教教団は単なる集団にしか過ぎないとする [同: 202-205]。

ブッダが僧侶をおいた目的は、社会の僕として人々に奉仕するためではないのかと問いかけ、仏教の将来は僧侶のありようにかかっているとアンベードカルは指摘した [Ambedkar 1997: introduction]。ナーグプル市では元日本人である佐々井などの僧侶や TBMSG といった外国の仏教教団が民衆を牽引しているが、本稿で取り上げるインド南部では、僧侶の絶対数が少なく、実物の仏教僧を見たことがないという者も多い土地柄である。

だがこのような地域で僧侶であるボディ・ダンマは求められている。その土地の出身でもなく言語も異なるボディ僧侶は、ある種の外部者であるが、地域の指導的な立場にある者を通してコミュニティに招き入れられ、改宗行動や決起集会を実施していく。人々は時間と経費とエネルギーを投

入して、外部者を呼び寄せ、自分たちの進むべき道のガイドとする現象が起きている。インド人僧侶が社会運動の実践者として社会の僕の役割を果たす姿の発現は、アンベードカルが示した青写真の実現化への一歩を刻むかのごときものである。

アンベードカルによる集団改宗から半世紀以上が経った今日、集団改宗や決起集会の現場で何が起き、それがいかなる意味を持つのか、人々が何を欲して外部の僧侶を招聘するのか、換言すれば、仏教徒運動における僧侶の役割を以下において実証的に検証していく。人々は何を期待して僧侶たるボディ・ダンマを招き入れるのか。この問いに答えることは、僧侶のプレゼンスが低いといわれる仏教徒運動にリーダーシップの観点から新たな局面を加えることになるう。

2. ナーグプル市以南における仏教徒の動き

カルナータカ州では、従来、キリスト教系の組織の活動が活発で、19世紀には女性や被抑圧階層のための学校が建てられ、多くのダリット指導者が登場した [Kshirsagar 1994: 386-387]。解放運動の観点からみると、ガンディー²¹⁾よりもアンベードカルの影響の方が強く、1956年のナーグプル市における集団改宗より以前から、仏教への改宗が認められた [同: 387]。

アーンドラ・プラデーシュ州も同様に、19世紀半ばにはキリスト教系の組織の活動が活発であったが、ヒンドゥー教徒の社会改革者によって被抑圧層への学校が建てられ、藩王による奨学金が供与される [同: 381-383] 等、ヒンドゥー社会内における被抑圧者の能力強化が図られてきた。20世紀半ばには、被抑圧層の寺院立ち入りを許可する法律が整備された地域もあり、アンベードカルとカンディーがこの地域の解放運動において重要な役割を果たした [同: 383-385]。

2-1. 調査地の概要

調査地は、ムンバイ、ビジャプル市 (カルナータカ州)、グルバルガ市 (同)、ビダル市 (同)、アディラバード市 (アーンドラ・プラデーシュ州)、ナーグプル市 (マハーラーシュトラ州) で、いずれも仏教徒の拠点である [表1 参照]。既に仏教に改宗した、あるいは将来の集団改宗に向けて準備をすすめるコミュニティで、ホラヤ (Holaya) あるいはマハール (Mahar) と呼ばれた人々が大半を占める。一部地域には、元ナクサライト (共産主義武装集団) の活動家もいた。ナーグプル市は元日本人僧侶の佐々井秀嶺、それ以外ではインド人僧侶のボディ・ダンマがそれぞれイニシアティブをとっている。

表1：調査地の概要

S.No.	訪問地名	集会開催場所など	日にち	集会開催時間	参集人数
《カルナータカ州》いずれも区 (ward) レベル					
1	カンタリアウト (Kantalayout)	Babasaheb Dr. Ambedkar Academy (2007年11月18日建立) Gulbarga 市郊外。第2の禅塾構想の地	10/29 (木)	- (集会はせず視察のみ)	-
2	ヒーラプル (Heerapur)	Parbuddha Budha Vihar 集落人口: 500 世帯 3000 人ほとんどが仏教徒	10/29 (木)	11:15 ~ 12:30	男性 70 女性 2

3	ガラバンティ (Garavanti)	Chandramani Budha Vihar 2002年9月1日、富士玄峰（臨済宗南禅寺派） 僧侶が仏像を寄付。集団改宗挙行 集落人口：175世帯1200人	10/29 (木)	15:15～17:15	不明
4	ビダル (Bidar)	Dr. Ambedkar Bhawan	10/29 (木)	18:30～21:15	男性90 女性12
《アーンドラ・プラデーシュ州》村 (gaon) レベル					
5	コルハリ村 (Kolhari)	これから寺を建てる 土地5エーカーをボディ僧侶に寄進した者が施主	10/30 (金)	15:00～17:00	男性300 女性150 警官(男)3
6	ウムリ村 (Umuli)	仏教徒の家の前の広場 集落人口：4世帯58人	10/30 (金)	18:30～19:30	男性25 女性23
7	ピップルダリ村 (Pipladhari)	Lumbini Budha Vihar (2007年建立) 2008年10月3日集団改宗 集落人口：75世帯400人 村の70%はSC(=仏教徒)、30%はBC(=ヒンドゥー教徒)	10/31 (土)	13:00～14:30	男性75 女性50
8	ブクタプル (Bhuktapur)	Maha Pragya Budha Vihar (1979年建立) マハーラーシュトラ州やマディヤ・プラデーシュ州他、 近隣の仏教徒が出稼ぎのために移住してき形成した集落 集落人口：不明	10/31 (土)	20:00～22:00	男性40 女性50
《マハーラーシュトラ州》					
9	ワドネル (Wadhner)	寺の名称不明 (1970年建立) 集落人口：800世帯2500人 SC、OBC、ムスリム、シク教徒の混成集落	11/1 (日)	12:50～14:15	男性45 女性6
10	ナーグプル (Nagpur)	ナーグプル大学 Dr. アンベードカル思想学部にて学術交 流準備の話し合い 修士課程1年54人、同課程2年34人	11/2 (月・祝)	10:30～12:30	男性13 女性2
11	カウタ (Kawatha)	龍國山曹源寺 (2004年建立) 幼稚園を併設 (教員2名、幼児30名) アンベードカルと共に集団改宗した男性、および幼稚園 教員2名に話を聞く	11/2 (月・祝)	16:30～18:30	男性1 女性2

2-2. 決起集会の流れとパターン

各式典・集会は、ボディ僧侶の移動時間に合わせて1日のうちいつでも行われた。各式典・集会ごとの若干の相違と特徴はあるものの、共通して一定の流れとパターンがある。開始から終了までおおそ90-120分程度で、住民の出迎えに始まり、住民の見送りで終わる。決起集会の流れとパターンを時系列で示すと以下ようになる。

- 国際仏教青年会 (International Buddhist Youth Organization: 以下IBYO) のメンバーが、宿泊所もしくは幹線道路まで迎えに来る
- 会場到着
- 青年会や地域有力者との打ち合わせ
- ボディ僧侶を含め、RINDAS 予備調査団は会場前方に設置されている椅子に着席。聴衆はゴザ・布・椅子などに座る (聴衆とは対峙するような位置関係)
- 会場前方に安置されているブツとアンベードカルの像・絵画に献灯・献花・献香
- 三帰依文などの仏教経典を全員で唱和 (おおそパーリ語)



写真1：幹線道路から会場までの道を先導する車両



写真2：ボディ僧侶の乗車車両を先導する仏教青年会員

- ボディ僧侶が日本人ゲスト（RINDAS 予備調査団）来訪の目的を紹介
- 日本人スピーチ（多くの場合、長崎、佐藤の順に話し、時間や興味に応じて、臨席した他の日本人が順番に話す）
- ボディ僧侶スピーチ
- ボディ僧侶は布施を受ける
- 記念撮影
- 横断幕や仏旗などを持って、仏教徒宅もしくは寺などへ移動（一種のデモ行進状態になる）
- 仏教徒宅もしくは寺（集会所）で施食を受ける
- 集会関係者への挨拶
- 退出（次の会場へ移動）



写真3：降車後、会場まで人びととともに歩く



写真4：会場に設置されているブツダとアンベードカル

終始人々は高揚感に包まれている。特に、住民による出迎えから会場到着までの移動では、デモ行進のような躍動感がある。仏旗を取り付けた機動力を持つ車両（オートバイクや自動車等）が幹線道路で待機し、同じく仏旗を付けたボディ僧侶およびRINDAS 一行の車両が通りかかると、静かにかつ丁寧にボディ僧侶に対して挨拶をするものの、その後、待機車両を先頭に全体が動き出すと、「アンベードカル博士菩薩万歳」といった掛け声や三婦依文などを大声で述べ、シュプレヒコールのように何度も繰り返すため、示威的な様相を呈する。また時として沿道に、鮮やかなマリーゴールドを手を持った人々が並び、ボディ僧侶およびRINDAS 一行が通過すると、その花を投げて祝福をしてくれる。このときにも、ブツダまたはアンベードカルを称えるコールや歌などが唱和される。会場までは、幹線道路から逸れた未舗装道路を通過していくため、仏旗を翻しながら移動する車両のたてる土煙や威勢のいい掛け声、参集する人間の数などにより、衆目を集める。その様子は、あたかも「仏教徒ここにあり」「アンベードカルに従う者たちここにあり」と喧伝しているかのようである。集会開催中は、コミュニティ外の人々が参加することはないが、調査地に隣接して居住するムスリムやOBC（その他の後進階級）が遠巻きに集会を見ていることはしばしばある。そして、集会終了後の移動の際も、同様にシュプレヒコールが飛び交うため、周囲に仏教徒の存在あるいはアンベードカルを旗印に団結しようとする人間の存在を内外にアピールするのに十分である。

2-3. ボディ僧侶による演説内容

ボディ僧侶の演説における論理展開には幾つかの特徴がある。それを順に見てみよう。予備調査中の演説や取材内容を時系列で整理したものについては表2を参照されたい。

表2：ボディ僧侶による演説内容（概要）

※表中の番号（たとえばNo.2）は、表1のシリアル番号を指す

<p>10月29日（木）No.2 ヒーラブル <佐藤スピーチで「教育を受けよ」「目覚めよ」「団結せよ」に触れたことを踏まえ> ● アンベードカル博士²²⁾の「教育を受け」「団結して」「闘え」というメッセージの重要性を再確認。</p>
<p>10月29日（木）No.3 ガラバンティ <長崎スピーチのRINDAS 予備調査団来訪の目的（①日印の関係構築 ②インドの現状を理解する次世代育成）を踏まえ> ● 集会名称のJAIBIM（Japan and India Buddhist Integrity Meet）の意味と意義の説明。 ● アンベードカル博士が与えてくれた恩恵は素晴らしいが、腹を満ちし安全に眠る場所があることだけに満足してはいけぬ。 ● 博士の「教育を受け」「団結して」「闘え」というメッセージの重要性を再確認。</p>
<p>10月29日（木）No.4 ビダル ● 集会名称のJAIBIMの意味と意義の説明。 ● アンベードカル博士が抑圧された人々に全てを与えてくれた。 ● 「Jai Bhim」を合言葉にするのはいいが、それを唱えてどこに行くのか？行き先はわかっているのか？博士が行き先（＝仏教）を示してくれている。 ● 仏教とは何か。→ その答えは『ブッダとそのダンマ』＋22の誓願。 ● 神を拝むことに意味はない。インドにはラクシュミー（豊穡／お金をもたらす）、サラスヴァティー（智慧をもたらす）を拝む人がいるが、インドは豊かにならない。日本やアメリカには両女神を信仰する人はいないが豊かである。それは何故か？ ● 日本から客人が来るのは、インド仏教徒が正しい（<i>sahi</i>）からであり、インド仏教徒に世界が注目しているため。 ● お腹が一杯になって「父なるお方（<i>babasaheb</i>）ありがとう」でいいのか。 ● <i>Bhim Shakti</i>（アンベードカルの力）が重要。 ● 日本を知ること（＝仏教を知る）＋仏教を勉強すること＝アンベードカル主義（<i>Ambedkar - vadi</i>）。 ● この集会に来て目標が達成されるわけではない。これは始まり&プロセス。 ● 博士がいなかったら、われわれは今頃何をしているだろうか。→ 靴で殴られているだろう。 ● 手のひらで受けた水の喩え（一度逃したものは二度と戻っては来ぬ）。</p>
<p>10月30日（金）No.5 コルハリ村 <ボディ僧侶の演説開始後、インタビューを受けるために席をはずしたため、一部わからず> ● 集会名称のJAIBIMの意味と意義の説明。 ● アンベードカル博士が与えてくれた恩恵の意味を考えなさい。 ● それを考えれば、どうすればいいか自ずとわかるだろう。 ● 運動が重要だ。 ● 今こそ、あなた方が決断すべき。団結か分裂か（→ 会場の参集者は「団結！」と返す）。</p>
<p>10月30日（金）No.6 ウムリ村 === <終始マラーティー語だったので意味がほとんど分からず> ===</p>
<p>10月31日（金）宿泊先のホテルにてテレビのインタビューに答えて（TV9リポーター：Mr. G. Srinivas） ● <リポーターより、今回の集会の開催趣旨を聞かれ> 集会名称のJAIBIMの意味と意義の説明。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ● <日本からの資金供与の有無に関する質問に対し> まずは日本側の関心（仏教徒運動への関心）が先にあり、資金の話は次に来る。日本使節団は調査に来た。私（ボディ・ダンマ）はそのサポートをしている。 ● <アーディヴァシー²³ 地域を訪問したのか> 否。仏教徒の居住地区である。 ● <仏教徒のみを支援対象にするのか。SCへの支援はないのか> 仏教徒だけを排他的に対象にしているわけではない。われわれは第一義にインド人である。ヒンドゥー教か仏教かということにこだわるべきではない。 ● <アーディヴァシーへの支援を考えているか> アーディヴァシーを含め、抑圧された人々にわれわれに賛同するものと共に運動をしていく。
<p>10月31日（金）No.7 ピップルダリ：寺に参集した人びとに向けて</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 集会名称の JAIBIM の意味と意義の説明。 ● アンベードカル博士が抑圧された人々に全てを与えてくれた。 ● 第2のアンベードカル博士は自然に現れはしない。 ● 佐藤先生も話したように、「教育を受け、団結し、闘え」（※但し、佐藤は演説中「教育を受けよ」「目覚めよ」「団結せよ」と発言）。
<p>10月31日（金）No.7 ピップルダリ…学校で小学1年生に向けて（集まった大人向けか）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● マハートマー・フレーも教育を重視した。 ● サラスヴァティー女神を拝んでも識字率は100%にはならない。 ● 日本はサラスヴァティー女神を拝まないが識字率は100%を達成。
<p>10月31日（金）No.8 ブクタプル</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 集会名称の JAIBIM の意味と意義の説明。 ● 獅子の子は獅子（自分の出自を知らず、他の動物に育てられたとしても、獅子は獅子として成長する）。 ● われわれはアンベードカル博士の子どもだ。子どもであれば何を手本に育つのか。→ 22の誓願。 ● 本当によいものが選ばれ生き残る。Made in Japan は Made in India よりも選ばれる。
<p>11月1日（土）No.9 ワドネル</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 日本人が来た目的の説明。 ● 集会名称の JAIBIM の意味と意義の説明。 ● 「教育を受け、団結し、闘え」のスローガン ● 団結できているか。この地域では先般の選挙で RPI、BSP、シブ・セナが競争しあったが、シブ・セナが圧勝した。このような状況で、団結があるといえるのか。 ● アンベードカル²⁴の力（<i>Bhim Shakti</i>）はどこにいったのか。今こそ仏教革命（<i>Buddha kranti</i>）が必要だ。 ● 自分の腹が満足すれば、「われわれ」の苦しみはどうでもいいのか？ ● 今こそ力（<i>shakti</i>）が必要。 ● アンベードカル博士は「団結せよ」と言ったのであって、「分裂せよ」とは言っていない。 ● シブ・セナにはヒンドゥー・トウバがある。あなた方には何トウバがあるのか？ → ブッダ・トウバがあるじゃないか。

一点目に、ボディ僧侶は、アンベードカル²⁴の伝記や自身の差別体験、聴衆の祖父母より以前の世代が受けたであろう差別体験を具体的に語り、聞き入る聴衆に被抑圧者としての自覚を喚起させる。この段階で、語る内容が鮮烈であったり、聴衆が特定の状況をフラッシュバックしたりすると、人

びとは涙し嗚咽がもれ聞こえる。そしてアンベードカルが被差別民衆に付与した諸権利について述べ、それを当たり前だと思っではいけないことを指摘する。たとえば、「博士がいなかったら、今でもわれわれは靴で殴られているだろう」（10月24日ビダル演説）、「アンベードカル博士が与えてくれた恩恵は素晴らしいが、腹を満たし安全に眠る場所があることだけに満足してはいけない」（10月29日ガラバンティ演説）、「自分の腹が満足すれば、われわれの苦しみはいつでもいいのか」（11月1日ワドネル演説）などがこれに相当する。

二点目に、差別を正当化するヒンドゥー教を否定しその放棄を呼びかける。ヒンドゥー教信仰が迷信であることを示し（「ラクシュミー神やサラスヴァティー神を拜んでも、インドは豊かにならない」10月29日ビダル演説、「（智恵の神たる）サラスヴァティー女神を拜んでも識字率は100%にならない」10月31日ピップルダリ演説）、仏教の合理的思考を強調する。但し、仏教とは何かについて語る時、それはアンベードカル著作内の記述や彼の発言であり、『ブッダとそのダンマ』と22の誓願を掲示する（10月29日ビダル演説および10月31日グプタプル演説）。同様に、仏教への入信を薦めるが、積極的な仏教徒としての姿を具体的に示すわけではない。具体的に述べられるのは、家庭内で信仰しているヒンドゥー教神像を捨てることや、ヒンドゥー教の祭祀・儀礼に従わないこと、それらを放棄したからといって不利益を被らなかったという事例の紹介といった、ヒンドゥー教の否定方法である。

三点目に、外国のもつ良いイメージを有効に利用している。「Made in Japan は Made in India よりも選ばれる」（10月31日グプタプル演説）、「日本はサラスヴァティー女神を拜まないが識字率は100%を達成」（10月31日ピップルダリ演説）などがそれであり、そういった先進的な外国人がわざわざインドの仏教徒に会いに来た理由づけとして「日本から客人が来るのは、インド仏教徒が正しい（*sahi*）からであり、インド仏教徒に世界が注目している」（10月29日ビダル演説）と説明する。集会の名称でも、外国の名前をはっきりとわかる形で掲示する。仮にドイツからの訪問団があれば、German を冠し、ドイツに関する肯定的な情報が演説内容に組み込まれると思われる。



写真5：集会開催後、横断幕を持って村内を歩く

四点目に、ボディ僧侶はキャッチ・コピーを多用する。集会開催時、ボディ僧侶は自身の演説の中で（1）集会名称 JAIBIM (Japan and India Buddhist Integrity Meet)、(2)「教育を受け、団結して闘え」（アンベードカルが演説などで頻用した言葉）、(3) Buddha Joti (仏灯)、(4) Bhim Shakti (アンベードカルの力) といった言葉を頻繁に使用したり説明したりした [表2 参照]。



(2) 以外は、ボディ僧侶が自分で考案した語彙である。RINDAS 予備調査団の同行先で開催された集会では、ボディ僧侶が予め指示して

写真6：会場に下げられた JAIBIM の横断幕

いたため、布もしくはビニル製の横断幕が製作され、この(1)集会名称 JAIBIM が印刷されていた。JAIBIM は、仏教徒の挨拶語である「ジャイ・ビーム」を意識して冠された名称である。スペルの相違はあるが、発音すれば「ジャイビム」(JAIBIM)と「ジャイ・ビーム」(Jai Bhim)はほとんど同じに聞こえる。(3)(4)に関しては、常にセットで用いられる。どちらも b の音から始まり、語尾も韻を踏んでいるので耳になじみやすい。いずれもキャッチ・コピーのように用いられ、集会中にこの言葉を含んだフレーズが何回も繰り返される。集会の開始時には耳慣れない言葉であったとしても、集会が終わりに近づくころには耳になじんでいる。これらを頻用することで、仏教徒へ意識づけを行っている。

こうしたキャッチ・コピーを多用するのは、メディアへの露出を意識しているからでもある。今回の調査期間中も、地元のケーブルテレビを中心に取材を受けるなど、ボディ僧侶は積極的にメディアの取材を受けた²⁴⁾。その際、短い時間で効果的に活動意図を伝えるために、上述のスローガンやキャッチ・コピーを巧みに盛り込んで応答していた。取材後、ボディ僧侶は仏教徒側が撮影していたものを中心に、記録映像を CD や DVD といった媒体におとし、複製を作成してダリットの多い地区や知人に配布する。このような広報活動により、それらを観た者たちを介して口コミで情報が広まり、「次はわれわれの地域で集会を開催願いたい」といった依頼が来るとのことであった。ボディ僧侶は、他団体が作成したものも複製を入手して活用している²⁵⁾。

五点目に、主要な使用言語はヒンディー語・マラーティー語もしくは英語であった。たとえばガラバンティ村(カルナータカ州;表1の番号 No.3)の司会者は、推定 50 代の男性であったが、複雑な話や興が乗った時には地方の主要言語であるカンナダ語に切り替えていたものの、ほぼ全過程英語で司会をしていた。他の調査地においても、英語とまではいかないまでも、ヒンディー語が共通語として機能していた。ヒンディー語文化圏でない場所でヒンディー語が機能するという事実は、彼らが学校などで母語でない言葉の教育を受けているということを示している。

また、ウムリ村(アーンドラ・プラデーシュ州;表1の番号 No.6)では、ボディ僧侶の演説はマラーティー語で行われた。マハーラーシュトラ州と地理的に近いことがマラーティー語を住民が理解する理由として説明を受けた。その他の調査地においても、興に乗ってきたボディ僧侶の言語が途中からマラーティー語に切り替わることがしばしばあった。地理的類似性という観点からは、今回訪れた地域の多くはマハーラーシュトラ州とアーンドラ・プラデーシュ州の境界に近い地域である。マラーティー語、ヒンディー語が主要言語として機能し、英語が補助言語となっていることが確認できた。

六点目に、民衆とのインターアクションを重視している。通常、インドでは壇上や前方にいる主催者/主賓などが対峙する聴衆に一方的に教説する形式の集会が多いが、本件調査でみたのは、ボディ僧侶が問いかけると民衆が応える形式で開催される集会であった。10月30日コルハリ村での演説に代表されるように、仏教徒もしくは下層民衆による運動が重要だと述べる文脈において、打てば響くような関係性とその空間で醸成される。これは参集者の人口規模とも関係しよう。

2-4. 考察

通常、俗人活動家が行う集会は、政治関連団体の支援を受けるか、その個人の意図が強く反映されるものであるため、同世代の同性の集まりになる。特に20-50代の男性の集まりになることが多い。これらの集会と僧侶が臨席する際の決定的違いは、老若男女が集会に参加することである。新生児の命名や病氣治癒を依頼する者もあり、僧侶に「祝福」を授けてもらう意図があることが分かる。

集会主催者に、なぜボディ僧侶を招聘したのかを聞いたところ、カウタをのぞく他の全ての場所において、主催者本人がボディ僧侶の活動記録映像（2003年のバンガロールでの改宗式）を見るか、映像を見た主催者の近親者（青年層）に強く勧められており、エネルギーで心を動かす演説を自分の地域でも実施してもらいたいというのが理由だった。続いてボディ僧侶の印象について質したところ、僧侶であることに裏づけられる禁欲的な姿勢（妻帯しないこと、酒を飲まないことなど）については全員が感銘を受けており、政治に巻き込まれていない清廉潔白さ、血縁によるしがらみの縛りを受けないことを挙げる者も複数いた。

ボディ僧侶は少なくとも90年代後半からすでに青少年育成に熱心であった。当時、実際にコミュニティに入って行くときの最初のキーパーソンは50代以降の壮年・老年の地域のダリット有力者であることが多かった。しかし数回にわたり訪問した後は、その有力者はそもそも本来業務に忙しいこともあり、有力者の息子（たいてい20-30代の青年）を窓口にしてやり取りをした。ボディ僧侶曰く、若者の方が伝統や規則に無条件に従うことをせず、正当性を見出せば変更や廃止に対して果敢に挑戦していこうとする意志が強いから、とのことであった。それなりに人生の経験を重ねた世代の価値観を変えることは容易でないことをボディ僧侶は強く意識していた。改宗を経た仏教徒の間では、僧侶になる者は定年退職後の男性が圧倒的に多く、その意味で、僧侶といえば年配者というイメージが強い。ボディ僧侶は、出家か在家かということにとらわれることなく、若い世代の育成を僧侶の組織化に優先させた。日本における修行を一旦終えて帰国したボディ僧侶がナーグプル市で活動する際に最初に組織したのは、サンガ（僧伽）ではなく在家の青年グループIBYOであったことがそれを示している。

今回調査で訪れた全ての場所において、地域の仏教青年会が主導して式典を開催し、ボディ僧侶の送迎や食事の世話、行政への申請手続き等、全ての過程を取り仕切っていた。こういった仏教青年会は、自然発生的にできたものではなく、ボディ僧侶が、数ヶ月から数年かけて組織したものだ。これら仏教青年会は1994年創設のIBYOの支部との位置づけであるため、会長はボディ僧侶自身で、それぞれの活動拠点に地域名を冠した支部長がいる。たとえば、グプタブル（カルナータカ州；表1ではNo.8）では国際仏教青年会グプタブル支部長といった具合である。式典や集会開催に関する最初のコンタクトをボディ僧侶がとるか否かは場合によるが、仏教青年会の支部長はおおよそ20-40代の青年・壮年のダリット俗人男性である。支部長たちはまだ仏教へ改宗していない場合もあるが、すでに挨拶は「ジャイ・ビーム」を使用し、たいていの場合、公務員やビジネスマンなど、地域の

中では安定した職業に就いている。口コミなどで広がったVCDやDVDに収録されたボディ僧侶の活動記録を観たり人づてに聞いたりして、ボディ僧侶にコンタクトを取る場合が多いとのことだ。

現在、ボディ僧侶はこういった人物をキーパーソンとして、そのコミュニティに引き入れられ、式典や集会を開催する。訪問が1度きりということはほとんどなく、複数回足を運ぶ中で、熱心にかつ誠実に働く20-40代の青年・壮年のダリット俗人男性に仏教青年会を組織させ、次回のボディ僧侶の訪問までに達成目標を与える。たとえば、今回は何月何日に来るので、それまでに村全戸の家の中のヒンドゥー教神像を一カ所に集めておくように、といった具合である。

ボディ僧侶にとって仏教青年会とはアンベードカルについて学び、仏教的視座を持つ地域のリーダーとなる人材を育成する試みの実践体であるが、このとき重要なのは、育成される側の人間に、新しい風を吹き込むボディ僧侶の言説を受け入れる素地がなくてはならないということだ。

アンベードカルの思想を伝える著作や演説集は、一時発禁になっていたりもしたが、1956年の集団改宗直後から出版されている。下層民衆は識字が低く文書を読めなかったとしても、独立インドの法務大臣を務める人間が「不可触民」層から輩出されたということは、マハール出身者でなくても知っていたであろう。そして、それぞれの地域には、政治家になったり安定した職業に就いてコミュニティを牽引していく同胞もいるのだから、そういった者を核として社会的地位の向上運動を展開してもよいはずである。それが、特に2003年以降、口コミによってボディ僧侶の存在を知った民衆が、言語や出自を超えて、ボディ僧侶を招き改宗や集会を行うというのは、ボディ僧侶自身に魅力を見出しているからである²⁶⁾。換言すれば、人々はコミュニティに今以上の変革を求め、その牽引役としてボディ僧侶を選んでいるといえる。

では、なぜボディ僧侶なのか。それはボディ僧侶が青年・壮年の思う「良き仏教徒」「本当の仏教徒」のロールモデルとしての役割の一端を担っているからである。すなわち、彼が俗人ではなく、完全に仏教に身を投じた僧侶であり、禁欲生活の実践によって世俗の垢にまみれていないという清潔かつストイックなイメージを持つことに加え、外国（非インド）の風を運んでくる点である。今回調査を含め、その他イベントでも、多くの外国人がボディ僧侶を通して仏教徒/下層社会を訪れる。逆に、ボディ僧侶もそれら外国人に招聘されて海外でも活動する。ボディ僧侶自身も「仏教留学」して日本仏教の中でも戒律が厳しく禁欲的な禅の修業を行い、現在も実践している。アンベードカルを良く学んでいる事が根底にあることは言うまでもない。学歴としても大学を出ており、政治、経済、国際関係、社会、文化など、多岐に亘る話もすることができる。こういったボディ僧侶が体现する「勤勉」「清潔」「ストイック」「外国」が、変化を欲する青年・壮年層にとって憧れであり、ロールモデルとなって、アンベードカルの言説を織り込んだボディ僧侶のアジテーションの効いた力強い言動によって、自分自身とコミュニティを変革していく原動力となるのである。仏教青年会に所属する層こそが、経済的にも実際に村/町の原動力である。変革を欲するコミュニティのニーズとロールモデルとしてのボディ僧侶の存在が見事に合致しているのである。

2-5. まとめ

得られた成果として、次の点を挙げるができる。(1) アンベードカル以来、俗人指導者が取りきれなかったイニシアティブを、出家者＝僧侶が担っている。ボディ僧侶の来訪を契機に俗人の指導者およびその予備軍が集会を開催し、次の集会を企画する。俗人のカバーしきれない領域を補完し、彼らの言説に正当性を加え、人々に祝福を与えることができるのは、僧侶だからである。(2) 一つの集会の開催、次のイベントの企画・実行という繰り返しが、あるコミュニティにおける仏教徒による活動となる。複数のコミュニティにおいて同時多発的にこのような活動が推進されるため、それが総じて仏教徒運動と呼ばれる流れをつくりだしている。(3) この仏教徒運動の担い手として、青年層の存在が注目される。イベント開催を企画・運営し、ボディ僧侶とのコンタクトをとるのは主に IBYO などの青年層である。イベントの主催者が比較的年配者の場合でも、その人物の息子・孫は IBYO など青年グループの指導者格である。(4) このとき同時に国際社会との仲介者として、ボディ僧侶は国際社会＝外国のもつイメージを有効に利用している。それを効果的に伝達可能にするのが耳馴染みのよいキャッチ・コピーである。(5) 仏教寺院や地域の会館が集会所として活用されている。寺や集会所がまだない場合でも、イベントの際には仮設テントが張られ、世代と性別を越えて人々が集まる場が確保されて、そこで思想や意見が共有される。(6) このとき共有されているのは、各人の差別体験に加え、アンベードカルの生き様と彼が残した言葉である。アンベードカルの時代の被差別層への不当な扱い、自分や家族が受けた差別体験に思いを馳せ、それを克服していくには、仏教徒として 22 の誓願を守り、「教育を受け、団結して、闘う」ことが確認される。個人の体験が、アンベードカルの言説を通して、コミュニティの体験として置換され、差別に抗するアイデンティティ構築に正当性を与える。そして平等に根ざす仏教こそがその目的を貫徹するものであることを確認する。

3. おわりに

本件調査を通して、インド南部における仏教徒運動とはアンベードカルの業績や言動の延長線上に自らを位置づけつつ、被抑圧者としての自覚に基づいた仏教徒アイデンティティの喚起や鼓舞を骨子とする仏教徒民衆の行動の総体であることをその特徴とともに明らかにした。

このような改宗行動と決起集会のありかたは、民衆に操作的客体化を求める点、差別体験を有する個人の経験をアンベードカル化のプロセスを経てコミュニティの経験として置換したうえで差別に抗するアイデンティティを構築しているという点で、ナーグプル市の仏教徒運動に見られるものと同類である。すなわち、根本が指摘した「アンベードカル化された」仏教活動家のありようと類似している。しかし、地域の俗人指導者ではやりきれなかったことをボディ僧侶は行い、俗人指導者やその継承者たる青年・壮年層の活動を補完する役割を果たすからこそ、「新しい風」としてボディ僧侶はコミュニティに招き入れられる。そのとき、僧侶という立場は、アンベードカルの教えの実

踐者であるという位置づけとなって、地域の俗人指導者同士の境界を超越し、異なる主義主張をもつ者同士を結びつける役割を果たしていると考えられる。この点については、今後、インド南部の仏教徒運動をより詳細に調査研究していく中で実証的に明らかにしていきたい。

註

- 1) インドにおける仏教徒について述べる時、常にひとつの議論となるのが、仏教徒に対する呼称である。概して1956年以降、アンベードカルに従って仏教へ改宗した人々のことを、既存の仏教と区別する意図から「新仏教徒」と呼称することが多い。またインド仏教徒のマジョリティは「不可触民」からの改宗者であるため、非「不可触民」を出自とする仏教徒が自分たちを単に仏教徒と呼称するのに対し、下層からの改宗者を「新仏教徒」と呼ぶ場合もある。仏教を継承する立場として正統か異端かということに加え、身分に基づく差別的なニュアンスを含む語が「新仏教徒」である。筆者は、既存研究〔山崎1996, 1994; 山際1993; 藤吉1991; 佐藤1978; 奈良1968〕を踏まえたうえで、差別語と認識する者がいる状態で、当事者が不快と感じる言葉を使用することは回避するのが妥当と考え、加えて「新」をつけることで既存の仏教徒とは異なる信仰を保持しているとの誤解を与えかねないと判断し、本稿中では単に仏教徒という言葉を用いる。
- 2) 1961年、インド共和国マハーラーシュトラ州ナーグプル市生まれ。インド社会では「不可触民」とされるマハールの出身。高校時代の差別体験により、自分が「不可触民」であることを強く自覚し、カーストを超える存在として仏教徒となり、佐々井秀嶺に師事して出家した。1986年、25歳のとき、臨済宗南禅寺派の富士玄峰僧侶の紹介により、岡山県の曹源寺（臨済宗妙心寺派）に入り、15年修行。1995年以降は、日本とインドを往復しながら活動する。
- 3) たとえば2003年10月のバンガロールにおける仏教への集団改宗式には、5万人の参加があった〔下記サイトを参照：2003年10月14日付 <http://wwrn.org/articles/13659/?&place=india§ion=buddhism> および2003年10月19日付 <http://www.hinduismtoday.com/blogs-news/hindu-press-international/2,7515,15.html>〕。この改宗式に参加したボディ・ダンマ僧侶は、8万人が集団改宗式に臨んだとみている。
- 4) マハーラーシュトラ州で最大の不可触民カースト。マハールの伝統的職業は、死んだ家畜の処理、村役場の前・村の入り口などの清掃、地税支払いのための農民呼び出し、脱穀場の見張り、村・田畑などの境界線の記憶と訴訟における証言などであった。また、その多くは土地なし農民として農業にも従事した。ヒンドゥー教の観点から、これらマハールの伝統的職業は不浄視されており、また加えて、肉食、特に牛肉を食すマハールの習慣は不浄とされた。
- 5) たとえば“Thousands of Dalits embrace Buddhism”によれば、デリーで5万人が仏教徒に改宗した〔The Times of India のサイト2001年11月4日〕。
- 6) たとえば“5K dalits to convert to Buddhism”によれば、ラージャスターン州ラージコットで5000人が仏教徒に改宗予定である〔The Times of India のサイト2011年5月5日〕。
- 7) 本稿に記述した具体的内容は、この10日間の調査内容であるが、本件調査立案の根底には、過去に実施されたボディ僧侶の南インドにおける活動がある。1995年から1998年に筆者は、ボディ僧侶がタミル・ナードゥ州、ケーララ州、カルナータカ州の下層民衆の集落を訪問するのと同様、局所的にはあるが仏教徒運動を観察してきた。このときは、まだ大規模な集団改宗や決起集会が行われるのではなく、地域ダリットの有力者を仲介者として活動拠点を探索している状況であった。集会の開催はたいてい夜であった。言葉や文化の問題があり、土地の名士の仲介なくしてはコミュニティへ入っていくことすら難しい状況の中での活動であったが、ボディ僧侶はまだ仏教が波及していない地域への布教活動に意欲的で、特にアンベードカルを思想を民衆に伝達することを使命としていた。このときのボディ僧侶からの聞き取りによれば、(1) タミル・ナードゥ州およびカルナータカ州に特に力を入れており、(2) その理由は英語を使用でき、意思疎通が可能である、(3) 土地のダリット有力者がアンベードカルや仏教に

対し理解を示している、(4) 仏教を強調する前にアンベードカルの思想に対する理解を促す必要がある、(5) アンベードカルへの理解が醸成されれば必然的に仏教へ改宗していく、と述べていた。このようにボディ僧侶は、将来的に仏教への改宗運動の拠点をつくるために、まずはアンベードカルを民衆に説く活動に邁進していた。

- 8) 予備調査には、訪問した調査地の中から本調査地候補を挙げ、来年度以降の研究における調査拠点を設定するための基礎的情報を収集し、インドの研究機関との学術交流の準備をすることが目的として設定されていた。この点に関する成果としては、本調査地をカルナータカ州ビジャプル市とその周辺とし、ナーグプル大学とは研究者リストや著作に従って研究者間の交流を図る等、今後の学術提携を約束した。
- 9) Bhimrao Ramji Ambedkar (1891-1956)。コンカン地方の「不可触民」マハールとして生まれた。当時異例の教育を受け、アメリカ、イギリス、ドイツ等への留学の後、1922年に弁護士資格を取得した。1924年頃から弁護士として不可触民問題に取り組むと同時に、政界に進出し1930 - 40年代には不可触民解放運動の指導者として、マハーラーシュトラ州を中心に活動を展開した。1942年に労働大臣、1947年に法務大臣として入閣し、憲法起草委員会委員長として1949年にインド共和国憲法を發布した。1956年10月14日、ナーグプル市において仏教への集団改宗を挙行し、同年12月6日に病没した。いわゆる「新仏教徒」からは父とも菩薩とも尊敬される。「不可触民の父」とも呼ばれる。
- 10) カーストの外に位置づけられ、触れたり見たりすることを通して彼らの持つ不浄性が伝染すると考えられ不可触視される集団。アウト・カースト、アンタッチャブルなどとも呼ばれた。前世の業により不可触民に生まれるとされ、居住地や井戸の隔離などカースト・ヒンドゥーとは明確に区別され、不浄とされる職業に従事していた。19世紀後半からイギリス政府が官庁用語として「被抑圧階級 (Depressed Class)」という語を用いたが、この用語が不可触民のみを指すようになったのは1932年からである。さらに、1935年のインド統治法により不可触民が保護政策の対象になると「指定カースト (Scheduled Caste)」という官庁語が用いられるようになった。仏教徒はインド憲法上、指定カーストには含まれないが、彼らが仏教徒になった社会的経緯を考慮して、マハーラーシュトラ州では1961年以降、1986年以降はインド全州において、指定カーストから改宗した仏教徒であると証明できれば、保護の対象に含まれることになった。
- 11) 仏教に入信する際の誓願としてアンベードカルが22項目をマラーティー語で記述したもの。通常の五戒の他、ヒンドゥー教信仰を拒否する内容である。

仏教入信の22の誓願

- 1) わたしはブラフマー、ヴィシュヌ、マヘーシュを神とは認めないしまた崇拜もしない。
- 2) わたしはラーマとクリシュナを神とは認めないし、また崇拜もしない。
- 3) わたしはガウリーやガナパティのようなヒンドゥーの神々を神とは認めないし、また崇拜もしない。
- 4) わたしは神々が化身をとることについて認めない。
- 5) わたしはブッダがヴィシュヌの化身であることを信じないし、これが嘘で、偽りをなす者の主張であると考える。
- 6) わたしは祖霊祭を行わないし、祭餅を供えることもしない。
- 7) わたしはブッダの戒律に逆らうようないかなる行いもしない。
- 8) わたしはいかなる祭式もバラモンの手によって行わせることをしない。
- 9) わたしは全ての人間が平等であると信ずる。
- 10) わたしは平等の確立に努める。
- 11) わたしはブッダの説いた道に従う。
- 12) わたしはブッダによって説かれた十波羅蜜を守る。
- 13) わたしは全生類を慈しむ。
- 14) わたしは嘘をつかない。
- 15) わたしは盗みをしない。
- 16) わたしは邪淫をしない。
- 17) わたしは酒を飲まない。

- 18) わたしはダンマの三つの真理である知慧・戒（律）・（慈）悲の中に身をおく。
 - 19) わたしは人間の尊厳を傷つける者たち、また人間を不当に扱う者たちのヒンドゥー・ダルマを拒絶する。そしてわたしはブッダのダンマを選ぶ。
 - 20) わたしはブッダ・ダンマが真理であると確信する。
 - 21) わたしは新しい生活に入ったことを確信する。
 - 22) わたしはブッダの教えに基づいて真に生きることを誓う。
- 12) 全インドラジオ放送「私の哲学シリーズ」に出演したアンベードカルは、「自由・平等・友愛の概念はフランス革命ではなく仏教から学んだ」と述べた [Beltz 2005: 63]。
 - 13) **Republican Party of India**。アンベードカルの死後の1957年、彼の遺志を受け継ぐ形で設立された政党。支持者はマハラーシュトラ州に多い。前身は、1942年にアンベードカルがナーグプル市で設立した全インド指定カースト連合 (All-India Scheduled Caste Federation)。
 - 14) **Dalit Panther**。1972年に創設されマハールおよび仏教徒を中心とする青年組織。本拠地はムンバイにある。
 - 15) 1935年8月30日、岡山県新見市菅生村別所生まれ。1955年（20歳）に高尾山薬王院（真言宗智山派）にて出家した。1967年（33歳）に渡印。1968年よりナーグプル市を拠点として仏教徒コミュニティで生活し、仏教徒を宗教的・精神的に指導するようになった。1987年、インド国籍取得。BJP 政権下、2002年にはNMC (National Minority Commission : マイノリティ委員会) の仏教代表委員に任命され、3年の任期を務めた。佐々井秀嶺の活動については [島 1995] [白鳥 1995] [山際 2000] に詳しい。
 - 16) **Trailokya Bauddha Mahasangha Sahayaka Gana (TBMSG)**。TBMSG は1967年にイギリス人僧侶サンガラクシタによって創設された **Friends of the Western Buddhist Order (FWBO)** のブネーを拠点とする在インド組織である。西洋文化に根差しながら仏教を西洋に根づかせようとするもので、上座仏教、大乘仏教、チベット仏教を取り入れた、総合的な形のものである。出家主義は採らず、在家として日々の修養を通した仏教実践を提唱する在家仏教教団としての性格を持つ。ナーグプル市への進出は1991年で、市中心部より北東10kmほどのナーガロカにセンターが設立された。TBMSGの活動については [Beltz 2005: 208-221] に詳しい。
 - 17) ミャンマーにルーツを持つ瞑想家ゴエンカ (S.N. Goenka) が1969年にインドに設立した瞑想センターで、ヴィパッサナー瞑想という上座部の仏教僧が森林で行うより高度な瞑想を大衆化したものを実践するセンター。ナーグプル市郊外のイガトプリにセンターを設置したのは1976年。ヴィパッサナー瞑想による心の浄化を第一義としている。都会の喧騒から離れて静かに瞑想することを通して精神的安定を図る精神療法としての側面も強く持っている。
 - 18) ビームラーオ・アンベードカル (Bhimrao R. Ambedkar) の名前からきており、原意は「ビームに勝利あれ」だが、「アンベードカル万歳」といった意味あいで使用される。広くインドで交わされる挨拶語「ナマステー」のように、他者と対面した際、別れの際などに使用される。より丁寧な挨拶の場合は、「ナマステー」の時と同様、両手を合わせて「ジャイ・ビーム」と言う。
 - 19) たとえば、個人名として男性ならラーマ、クリシュナなどからガウタム、シッダールタ、女性ならガウリー、ラクシュミーといったものからマヤー、ヴァイシャリーなどへ名付けが変化した。仏教徒居住地の名称も、ドゥルガ・ナガルなどからブッダ・ナガル、シッダールタ・コロニーなどとなった。
 - 20) 政治的リーダーは「誰でもない」が84/145人 (57.9%)、「RPI リーダー」が37/145人 (25.5%)、「BSP リーダー」が14/145人 (9.7%) であった。宗教的リーダーについては「佐々井秀嶺」68/145人 (46.9%)、「誰でもない」32/145人 (22.1%) であるが、少数意見として「アンベードカル」4/145人 (2.8%)、「ダライ・ラマ」8/145人 (5.5%) の回答があった [榎木 2006: 80-82]。ダライ・ラマとは、チベット仏教ゲルク派の最高位の僧侶で、「大海の師」を意味する。チベットではダライ・ラマが聖界と俗界を統べるとされ、慈悲の観音菩薩の化身と考えられている。現在のダライ・ラマは14代目である。
 - 21) **Mohandas Karamchand Gandhi (1869-1948)**。カーティアワール半島の小藩王国ポールバンダルの大臣の長男として生まれた。ロンドン留学で弁護士資格を得て1891年インドへ帰国し、93年に訴訟事件の依

- 頼で派遣された先の南アフリカのナタールで被差別体験をした。現地のインド人を組織し、大衆的非暴力運動を成功させ、1915年1月の帰国後、19-22年に第1次サティヤグラハ闘争、30年に第2次サティヤグラハ闘争などの反英政治闘争を展開した。ガンディーは会議派を最大の大衆民族運動組織へ成長させ、インドの独立、不可触民問題、ヒンドゥー・ムスリム対立の除去に取り組むが、1948年1月30日、狂信的なヒンドゥー主義者に暗殺された。
- 22) 仏教徒やこれから仏教へ改宗しようとの意志のある者は、アンベードカルを父だと尊敬し「バーバーサーヘブ」(父なるお方)を冠するか、「アンベードカル博士」(Dr. Ambedkar)と呼称する。決して呼び捨てにはしない。
- 23) アーディヴァシー(Adivasi)。インドに居住する先住民の総称。主にデカン高原やオリッサ州、アーンドラ・プラデーシュ州の森林部に多く、狩猟採集生活など、独自の文化を持つ人々。一説にはインド全土に5,000万人いるともいわれる。
- 24) 但し、応じた取材が放映・掲載されることはほとんどない。本件調査中に取材に来たTV9も、テレビ局担当者がボディ僧侶に通達してきた日付と時間にはテレビ放映しなかった。こういった状況を「(下層民衆のニュースをあえて報道しないという)差別がゆえ」「取材を隠れ蓑にしてカースト・ヒンドゥーはわれわれがどのような活動をしているのか、探りに来ている」と考える仏教徒もいる。筆者は、ボディ僧侶を通して、TV9のレポーターに通達日時に放映をしなかった理由を電話で尋ねたが、「(テレビ局の上層部が決めたことで、自分にはわからない)」という返答を得た。
- 25) たとえば、ダリット・クリスチャンを支援する西欧の団体が作成したインドにおける不可触民差別の実態を記録したDVD「India Untouched」。これはYouTubeでもシリーズ化されており、閲覧可能である[<http://www.youtube.com/watch?v=6g1swBpKCJ8>]。
- 26) ボディ僧侶は、ムンバイを含むマハーラーシュトラ州や南インド諸州他、グジャラート州、パンジャールプ州、西欧への移住者コミュニティをも訪問する。

参考文献

- 榎木美樹、2003、「ナーグプル市の仏教徒の現状(上)」、『仏教学研究』、第58・59合併号、152-208頁。
- 、2004、「現代インドにおける仏教徒コミュニティナーグプル市を事例として」、神子上恵生教授頌寿記念論集刊行会編、『インド哲学佛教思想論集』、永田文昌堂、177-215頁。
- 、2006、「ナーグプル市の仏教徒の現状(下)」、『仏教学研究』、第60・61合併号、66-86頁。
- 小谷汪之、1996、『不可触民制とカースト制度の歴史』、明石書店。
- 佐藤良純、1978、「インドのネオ・ブディストについて」、『三康文化研究所所報』、第4号、三康文化研究所、23-37頁。
- 島岩、1995、「マハーラーシュトラにおける仏教徒の現状」、『北陸宗教文化学会紀要』、第7号、北陸宗教文化学会、17-43頁。
- 白鳥早奈英、1995、『インド不可触民の解放をめざして—佐々井秀嶺氏の熱き闘いの日々』、かのう書房。
- 内藤雅雄、1994、「マハーラーシュトラにおける不可触民解放の思想と運動」、内藤雅雄(編)『叢書カースト制度と被差別民 第3巻 解放の思想と運動』、明石書店、151-210頁。
- 仲尾俊博、1978・1979、『インド仏教徒との出会い』上・下、永田文昌堂。

- 奈良康明、1968、「現代インドにおける仏教の問題点」、『高田学報』、第59輯、高田学会、12-25頁。
- 根本達、2010、「『不可触民』解放運動とともに生きる仏教徒たちの民族誌」、筑波大学博士学位請求論文。
- 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子（編）、2006、『インド民主主義の変容』、明石書店。
- フィッツジェラルド、ティモシー、1994、「マーラートワダーに見られる村の仏教」、内藤雅雄（編）『叢書カースト制度と被差別民 第3巻 解放の思想と運動』、明石書店、211-240頁。
- 深沢宏、1972、『インド社会経済史研究』、東洋経済新報社。
- 藤吉慈海、1968、「現代インドの仏教復興運動—大菩提会とアンベードカルの運動を中心として」、『東方学報』、同朋舎、219-255頁。
- 、1991、「アンベードカルの仏教観」、『インド・タイの仏教』大東出版社、164-169頁。
- 堀本武功、1994、「独立後における不可触民の政治化」、内藤雅雄（編）『叢書カースト制度と被差別民 第3巻 解放の思想と運動』明石書店、337-365頁。
- 山際素男、1993a（初版1987）、『ブッダとそのダンマ』、三一書房。
- 、1993b、「インド仏教徒と佐々井秀嶺」上・下、『大法輪』11・12月号、大法輪閣、22-28頁、34-40頁。
- 、2000、『破天』、南風社。
- 山崎元一、1996（1979）、『インド社会と新仏教』、刀水書房。
- 、1994、「仏教改宗運動の系譜—ナラスとアンベードカル」、辛島昇（編）『ドラヴィダの世界』、東京大学出版会。
- 、1986、「古代インドの差別—シェードラと不可触民」、西順蔵・小島晋治（編）『世界差別問題叢書6 アジアの差別問題』、明石書店、83-149頁。
- Ambedkar, B. R., 1979, “Annihilation of Caste,” in Education Department Government of Maharashtra (ed.), *Dr. Babasaheb Ambedkar Writings and Speeches vol.1 Caste in India and 11 Other Essays*, Bombay: Government Central Press.
- 、1997（1957）, *The Buddha and His Dhamma*, Nagpur: Sugat Book Depot.
- 、2011, *The Buddha and His Dhamma*, Askash Singh Rathore and Ajay Verma (eds.), New Delhi: Oxford University Press.
- Beltz, Johannes, 2005, *Mahar, Buddhist and Dalit: Religious Conversion and Socio-Political Emancipation*, New Delhi: Manohar Publishers & Distributors.
- Fitzgerald, Timothy, 1988, “Buddhism and Social Change in Maharashtra,” 『愛知学院大学文学部紀要』、第18号、愛知学院大学文学会、50-73頁。
- 、1989, “B. R. Ambedkar on Caste and Buddhism,” 『愛知学院大学文学部紀要』、第19号、愛知学院大学文学会、54-67頁。
- Jaffrelot, Christophe, 2009（2005）, *Dr. Ambedkar and Untouchability: Analysing and Fighting Caste*,

- New Delhi: Pauls Press.
- Keer, D., 1971 (1954), *Dr. Ambedkar: Life and Mission*, Bombay: Popular Prakashan.
- Kshirsagar, R. K., 1994, *Dalit Movement in India and Its Leaders*, New Delhi: M. D. Publications.
- Limaye, M., 1995, *Manu, Gandhi and Ambedkar and Other Essays*, New Delhi: Gyan Publishing House.
- Moon, Vasant, 2002 (1995), *Growing Up Untouchables in India: A Dalit Autobiography*, Gail Omvedt (tr.), New Delhi: Vistaar Publications.
- Omvedt, Gail, 1994, *Dalits and the Democratic Revolution: Dr. Ambedkar and the Dalit Movement in Colonial India*, New Delhi: Sage Publications India.
- , 2003, *Buddhism in India: Challenging Brahmanism and Caste*, New Delhi: Sage Publications India.
- Parkash, Prem, 2011, *Ambedkar, Politics and Scheduled Caste*, New Delhi: Ashish Publishing House.
- Samanta, D. K., 1991, “Dominant Weak: A Case Study of the Nava Bouddha of Maharashtra,” *Anthropological Survey of India*.
- Tartakov, Gary, 2011 (2003), “B. R. Ambedkar and the Navayana Diksha,” in R. Robinson and S. Clarke (eds.), *Religious Conversion in India: Modes, Motivations, and Meanings*, New Delhi: Oxford University Press, pp. 192–215.
- Thorat, Sukhadeo and Narendra Kumar (eds.), 2011 (2008), *B. R. Ambedkar: Perspective on Social Exclusion and Inclusive Policies*, New Delhi: Oxford University Press.
- Varm, S. L., 1998, “Problems before Ambedkarism,” in S. Lal and K. S. Saxena (eds.), *Ambedkar and Nation-Building*, New Delhi: Rawat Publications.
- Zelliot, E., 1998 (1992), *From Untouchable to Dalit: Essays in the Ambedkar Movement*, New Delhi: Manohar Publishers & Distributors.

参考ウェブサイト

- Hinduism Today のサイト : Hundreds Of Dalits Embrace Buddhism in Bangalore (2003年10月19日)、
<http://www.hinduismtoday.com/blogs-news/hindu-press-international/2,7515,15.html>、2011年6月19日アクセス
- India Untouched のサイト : <http://www.youtube.com/watch?v=6g1swBpKCJ8>、2011年6月19日アクセス
- The Times of India のサイト : Thousands of Dalits embrace Buddhism (2001年11月4日)、http://articles.timesofindia.indiatimes.com/2001-11-04/india/27244895_1_audit-raj-conversion-ceremony-dalits、2011年6月19日アクセス

The Times of India のサイト：「仏教 (Buddhism)」をキーワードとして検索できる Times of India 内の検索 <http://articles.timesofindia.indiatimes.com/keyword/buddhism/featured/3>、2011年6月19日アクセス

Worldwide Religious News のサイト：Dalits concerted to Buddhism in Bangalore (2003年10月14日)、<http://wwrn.org/articles/13659/?&place=india§ion=buddhism>、2011年6月19日アクセス